## 2019年度 体育史学会 第8回大会

プログラム・発表抄録集

大学サテライトプラザ彦根

2019年5月11日(土)~12日(日)

## |体育史学会について |

〇. 「学会名鑑(日本学術会議・公益財団法人 日本学術協力財団・国立研究開発法人 科学技術振興機構が連携して作成しているデータベース)」に掲載の情報をもとに作成しました。

(2019年4月10日現在)

#### 和文名

体育史学会

#### 欧文名

JAPAN SOCIETY OF THE HISTORY OF PHYSICAL EDUCATION AND SPORT

#### ウェブサイト

http://taiikushi.org/

#### 学術研究領域

哲学、心理学、教育学、社会学、史学、健康・生活科学

#### 設立趣旨

多様化の容認と相互理解の促進をめざす現代社会において、体育・スポーツはこれ自体が変化するとともに、社会の変化にも避けがたい影響を与えている。このような状況の中、体育・スポーツと社会の将来を展望するために必要となる歴史的知見の蓄積が、社会的に要請されている。体育史学会はこの要請に応えるべく、体育史研究者による研究上の緊密な連携によって体育・スポーツ史に関する研究の発展を図ることを目的に設立された。

#### 沿革

1961年 日本体育学会体育史専門分科会(前身)設立

2011年 体育史学会 設立(設立年月日:2011年9月25日)

2015年 日本学術会議 協力学術団体に登録

2016年 日本スポーツ体育健康科学学術連合 加盟学術団体に登録

#### 役員

会長1人、理事6人、監事2人(男性6人、女性3人)

#### 会員数

会員数 233人: 正会員 210人、学生会員2人、名誉会員 14人、講読会員 5人

#### 刊行物

『体育史研究』

欧文名: Japan Journal of the History of Physical Education and Sport

創刊年:1984年 最新号:36号(2019年3月発行)

発行部数:260(部/回)

URL: http://www.taiikushi.org/db/

#### 他の学術団体との関係

日本体育学会 専門領域体育史

日本学術会議 協力学術研究団体

日本スポーツ体育健康科学学術連合 加盟学術団体

## 2019年度 体育史学会 第8回大会 開催要項

#### 1. 日程

1日目:5月11日(土)15:00~18:50

一般研究発表、研究方法セミナー、情報交換会(19:20~21:20)

2日目:5月12日(日)9:45~11:20

一般研究発表、総会(11:30~12:30)

#### 2. 会場・会場責任者

大学サテライトプラザ彦根(JR彦根駅前 平和堂アル・プラザ彦根6階)

大会幹事:榎本雅之(滋賀大学)

#### 3. 交通

JR琵琶湖線(東海道本線)彦根駅西口より、徒歩すぐ。

https://www.shiga-u.ac.jp/information/info\_campus-access/info\_campus-access\_route/

#### 4. 参加費

会員:1,000円、非会員:2.000円、学生(会員・非会員を問わず):無料

#### 5. 一般研究発表時間

発表 20分、質疑応答 10分(計 30分)

#### 6. 学会企画:研究方法セミナー

演者:鈴木明哲(東京学芸大学)

演題:体育・スポーツ史研究の叙述 ―― 投稿論文を創る ――

司会:和田浩一(フェリス女学院大学)

#### 7. 情報交換会 会費 5,000円 (学生 2,000円)

5月11日(土)19:20~21:20

Pomme d'Amour ポム ダムール (彦根城の近く)

#### 

情報交換会への参加を希望される方は、次の手順でお申し込み下さい。

1) 申込先:体育史学会事務局 taiikushi\_office@taiikushi.org

2) 〆 切:2019年5月7日(火)13:00

3)方法:次の2点を記載したメールを、事務局へ送って下さい。

(1) 会員氏名、(2) 学生・非学生の別

\_\_\_\_\_\_

## 体育史学会第8回大会(2019年)プログラム

## 1日目 5月11日(土) 15:00開会

| 開始時刻            | 発表者                                  | 演題  | 座長                |
|-----------------|--------------------------------------|---|-------------------|
| 15:00<br>~15:30 | 冨田 幸祐<br>(日本体育大学オリンピッ<br>クスポーツ文化研究所) | 小野庄次郎『樺太野球史』(1940)にみる樺太に<br>おける野球の展開                              | 秋元 忍<br>(神戸大学)    |
| 15:30<br>~16:00 | 山村 洋子<br>(北海道大学大学院)                  | 『広報ところ(通信)・きたみ』にみるローカル・アイデンティティーの分析 ―― 「竹ぼうき」時代のカーリングから「ロコ・ソラーレ」へ | 秋元 忍<br>(神戸大学)    |
| 16:00<br>~16:30 | 尾川 翔大<br>(日本体育大学スポー<br>ツ危機管理研究所)     | 1930年代初頭における府県体育協会の設置: 「内<br>務省-府県体制」に着目して                        | 新井 博<br>(日本福祉大学)  |
|                 |                                      | 【 休憩 10 分 】   |                   |
| 16:40<br>~17:10 | 石立 克己<br>(北海道大学大学院)                  | 拡大的アスレティシズムに関する研究 —— 労働者<br>階級の包摂とボーイスカウト運動                       | 來田 享子<br>(中京大学)   |
| 17:10<br>~17:40 | 伊東 佳那子<br>(中京大学大学院)·<br>來田 享子(中京大学)  | 1964年「東京五輪おどり」に関する検討 —— 花柳秀による振付の経緯と踊りの再現を中心に                     | 和田 浩一 (フェリス女学院大学) |
|                 |                                      | 【 休憩 10 分 】   |                   |
| 17:50<br>~18:50 | 鈴木 明哲<br>(東京学芸大学)                    | 【研究方法セミナー】<br>体育・スポーツ史研究の叙述 —— 投稿論文を創る                            | 和田 浩一 (フェリス女学院大学) |
| 19:20<br>~21:20 |                                      | 情報交換会 (ポム・ダムール)   |                   |

#### 2日目 5月12日(日)

| 9:45<br>~10:15  | 榊原 浩晃<br>(福岡教育大学)・<br>田端 真弓(大分大学) | 明治初期・都城縣『小学館一巻』(明治5年)に<br>みる体操関連史料記述 — 学制公布前後の時代に<br>おける郷校(都城縣)の課目・体操 | 大久保 英哲<br>(金沢星稜大学) |
|-----------------|-----------------------------------|---|--------------------|
| 10:15<br>~10:45 | 新井 博<br>(日本福祉大学)                  | 昭和4年ヘルセットの指導によるスキージャンプの向上   | 鈴木 明哲<br>(東京学芸大学)  |
|                 |                                   | 【 休憩 5分 】   |                    |
| 10:50<br>~11:20 | 木 下 秀 明<br>(元日本大学)                | 陸軍戸山学校機関誌「研究彙報」と「体育と武<br>道」の推移  | 田原 淳子<br>(国士舘大学)   |
|                 |                                   | 【 休憩 10分 】  |                    |
| 11:30<br>~12:30 |                                   | 総会  |                    |

<sup>\*</sup> 発表 20分、質疑応答 10 分(計30分)、研究方法セミナーは60分。

#### | ◆ 体育史学会のこれまでの学会大会と研究方法セミナーの軌跡 |

#### 第1回大会(2012年5月12-13日、福山平成大学)

楠戸 一彦(広島大学)

○ 歴史研究の課題:実証と解釈

#### 第2回大会(2013年5月11-12日、明治大学和泉キャンパス)

阿部 生雄(筑波大学名誉教授)

○ スポーツ史におけるイデオロギーと無意識:概念史、人物史、制度史

#### 第3回大会(2014年5月10-11日、神戸大学発達科学部)

山本徳郎(奈良女子大学名誉教授)

○ 初期トゥルネン史研究で考えたこと

#### 第4回大会(2015年5月16-17日、ホルトホール大分)

木下秀明(体育史学会会員)

○ 私の陸軍戸山学校史研究:これ迄とこれから

#### 第5回大会(2016年5月14-15日、一橋大学)

寶學淳郎(金沢大学)

○ 私の東ドイツスポーツ史研究

#### 第6回大会(2017年5月13-14日、龍谷大学)

佐々木浩雄(龍谷大学)

○ 研究テーマの一貫性と俯瞰的視野:「体育・スポーツと国民統合」というテーマから

#### 第7回大会(2018年5月12-13日、中京大学)

村戸弥生(石川工業高等専門学校)

○ 蹴鞠口伝書読解方法について:

江戸初期蹴鞠書『中撰実又記』研究から地下外郎派蹴鞠復元へ向けて

#### 第8回大会(2019年5月11-12日、大学サテライトプラザ彦根)

鈴木明哲 (東京学芸大学)

○ 体育・スポーツ史研究の叙述 ―― 投稿論文を創る ――

#### 【研究方法セミナー】

## 体育・スポーツ史研究の叙述 -投稿論文を創る-

#### 鈴木明哲 (東京学芸大学)

#### はじめに

体育史学会及び日本体育学会専門領域体育史にとって、その定期刊行物『体育史研究』と『体育学研究』の質と量を向上させることは、目下の急務である。というのは、近年、科学研究費助成事業の項目からスポーツ史が消え、また日本体育学会においても、いつ専門領域の統廃合が言い渡されてもおかしくない状況にあるからである。私たちはこのような危機意識を共有しつつ、危機を乗り切るためには、投稿論文の質と量を充実させた上で、体育・スポーツ史研究の意義と価値を説明し、主張を強めていかなければならない。投稿された論文の質と量こそが、学会や学術領域の危機に際しての、最大の防御的主張たり得る。

一方、この十数年間、各大学における教員の削減が進行し、体育・スポーツ史研究を専門とする教員が全く在籍していない大学が多くなったことにより、これまで各大学で行ってきた修士課程及び博士課程における研究者養成が、以前のような水準を維持できなくなってしまった現状もある。特に国立大学法人には、その傾向が顕著である。戦後日本の体育・スポーツ史研究を牽引してきた旧東京教育大学体育学部体育史研究室のように、体育・スポーツ史研究を専門とする教員を3名も揃え、多くの学生、院生に対し盤石の指導体制をとることなど全くできない時代になってしまった。だが、私たちの昔を懐かしんでいる余裕はない。危機はそこまで来ていることに敏感でなければならない。

では、各大学が従前のように指導できないのであればどうすべきであるのか。それは学会、専門領域が一丸となり、大学間の枠をこえて研究者を指導し、養成していけばよいのである。目を海外に広げてみよう。ヨーロッパスポーツ史学会(European Committee for Sports History: CESH)では、毎年、若いこれからの研究者のために、ベテラン会員が論文の書き方とプレゼンテーションの仕方を講じている(International Student Seminar)。担当する会員は毎年異なり、毎回、各々が個性的なレクチャーをしているようである。国籍をこえて、人種をこえて、とにかく学会全体で次世代を含めて広範囲に、学術研究の質を維持していこうとする熱意がほとばしっている。見習うべき姿勢である。

本学会から発信する投稿論文の質と量、双方の向上のために、今回は誠に僭越ながらこれまでの投稿経験から得た知見をお伝えしたい。査読者の観点からというよりもむしろ、自身が投稿してきた中で、どのような叙述を心がけるべきであるのか、投稿者としての経験に基づいて話してみたいと考えている。掲載された論文数やその質はさておき、投稿回数では人後に落ちないものがあると自負している。特に今回は各大学の紀要論文ではなく、査読つきの投稿論文を創るということを前提に話を進め、論文を投稿するという行為こそが、自己の研究力を向上させる最良のトレーニングにほかならないこと、また投稿することでしか得られない、いくつかの知見についても説明していく予定である。

加えて本学会における理事会や編集委員会での議論を踏まえ、論文の出だし部分、つま

りは「緒言」の書き方に力点を置いて説明していく。なぜならば、この部分が論文全体の 土台であり、この部分が揺らいでいるようでは、その後に続く本論、結論の出来映えは査 読者に見透かされてしまうからである。慎重でありたい。

なお、本セミナーを聴講し、投稿論文のノウハウを知ったからといって、直ちに投稿論 文が受理されるほど、ことは簡単ではないとあらかじめ断っておきたい。「量が質を生む」 という言葉があるとおり、まずはガンガン書くことである。そうすると自然と質が上がっ てくる。そして最も大切なことは、投稿する勇気をもつことである。

#### 【主な内容】

1. 論文を投稿する前に 投稿規定を守ろう 要求水準を確認しよう

2. 緒言

先行研究の検討

課題設定

研究の目的

「明らかにされていないから、明らかにする」方式

研究方法

時期区分

3. 本論

資料の引用と表記

4. 結論

緒言との整合性 今後の課題

5. 最終チェック

図表と写真

論述

タイトル

要旨と英文概要

6. 論文の種別

原著論文と研究資料

7. 優れた論文とは?

引用回数

#### 【参考文献】

- ・花井信『論文の手法-日本教育史研究法・序説-』川島書店、2000年
- ・木下是雄『理科系の作文技術』中公新書、1981年
- ・佐藤臣彦「体育哲学・スポーツ哲学へのプロトレプティコス-哲学的思索とその表現のため の文献案内-」、『体育哲学・スポーツ哲学研究』第13巻第2号、1991年
- ・澤田昭夫『論文の書き方』講談社学術文庫、1977年
- ・澤田昭夫『論文のレトリックーわかりやすいまとめ方-』講談社学術文庫、1983年

#### 小野庄次郎『樺太野球史』(1940)にみる樺太における野球の展開

#### 冨田幸祐 (日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所)

#### はじめに

戦前日本の植民地であった樺太での野球の展開については、会田によって諸事実が明らかにされている。会田は、樺太での野球の展開の中心的存在として企業、官公庁、旧制中学校があること、1921 年から樺太日日新聞社が主催した全島樺太野球大会が開催されたこと、また 1929 年からは小樽新聞社主催の野球大会に樺太のチームも出場権が与えられ全道樺太野球大会が開催されていたことを明らかにしている 1。ただしこれらは『樺太日日新聞』や『小樽新聞』に掲載された樺太の野球に関する記事を網羅的に収集、整理して明らかとなったものであり、樺太における野球史を明らかにするうえで、よりいっそうの一次資料の収集は不可欠であるといえよう。そこで本発表では、同時代にまとめられた書籍である小野庄次郎『樺太野球史』(1940)の記述を手がかりとして樺太における野球の展開について明らかにするものである。

#### 小野庄次郎について

『樺太野球史』の著者である小野庄次郎は樺太庁逓信課の野球部に所属していた人物である。1930 (昭和5) 年に樺太に移動してきたことを『樺太野球史』の中で述べるにとどまっており、素性について定かではない。ただ『秋田魁新報』を確認すると、1930 (昭和5) 年1月から1931 (昭和6) 年12月にかけて秋田商業野球部出身の同姓同名の人物による寄稿が掲載されている。寄稿文の中には樺太の状況や野球に関するものがあり、またこ

の人物も 1930 (昭和 5) 年 2 月から 1931 (昭和 6) 年 8 月までの間に樺太へと移り住んでいることが確認でき、同一人物であると考えることができる $^2$ 。

#### 『樺太野球史』の内容

『樺太野球史』は1940(昭和15)年に発刊され、総頁数は478頁にも及ぶ。小野は序において『樺太野球史』は人に薦められて書いたこと、1938(昭和13)年から執筆を開始し刊行まで3年かかったので1938(昭和13)年までのことしか書けなかったこと、今後は毎年樺太の野球に関する年鑑の発行を考えていること、そして『樺太野球史』の今後のあり方について、以下のように記している。

|                         | -   |
|-------------------------|-----|
| 『樺太野球史』目次               | 頁   |
| 樺太野球史草分時代(昭和三年迄)        | 1   |
| 樺太野球界の黄金時代(昭和四年)        | 14  |
| 樺太野球史昭和五年               | 52  |
| 樺太野球史昭和六年               | 68  |
| 樺太野球史昭和七年               | 113 |
| 樺太野球史昭和八年               | 136 |
| 樺太野球史昭和九年               | 200 |
| 樺太野球史昭和十年               | 216 |
| 樺太野球史昭和十一年              | 230 |
| 樺太野球史昭和十二年              | 267 |
| 樺太野球史昭和十三年度一豊原の巻        | 305 |
| 全島少年野球大会優勝チーム年度別        | 371 |
| 樺日主催全島少年野球大会回顧座談会       | 372 |
| 少年野球史昭和四年               | 385 |
| 少年野球史昭和五年               | 395 |
| 少年野球史昭和六年               | 405 |
| 少年野球史昭和七年               | 425 |
| 知取野球史(昭和二年より十三年まで):佐藤和夫 | 442 |
| 本斗野球史: 丹野良次             | 455 |
| 眞岡野球史: 内藤勉              | 466 |
| 恵須取野球史(昭和四年頃より):梶原一郎    | 472 |

樺太全島の野球選手、野球チーム、野球フアンの親睦機関として一選手なり、野球ファンの誰しもが思ふことを発表し、また野球試合を批評したり、希望を述べたり、意見をのべたりそうしたことを自由にこの「樺太野球史」を通じて言ひあつたらいいではないか一と思ひます<sup>3</sup>

内容としては主に各年の試合結果について記されており、記録の収集には『樺太日日新聞』、『樺太毎日新聞』等の新聞記事やスコアブックを用い、また執筆は数名の手伝いを得て行われたという。掲載されている試合の中には、会場、イニング毎の経過、打数、安打、三振、四球、盗塁、失策の各合計数、主審、塁審、試合の開始時刻と終了時刻がなど詳細に記述されているものがある半面、新聞にもスコアブックにも記録が残っていないものや、著者である小野も現場にいなかったので状況がわからないものなど、記載することのできない試合が多々あったという。また小野が所属していた逓信課野球部が豊原にあることから、豊原に関する記述が多くなっている。ただし後半部には知取、本斗、眞岡、恵須取各都市における野球史について記述がなされている(「『樺太野球』目次」参照)。

また『樺太野球史』には各試合の新聞記事や結果に対して小野が批評を行っているという特徴がある。例えば『樺太日日新聞』の野球記事について「『樺太日日新聞』の記事はでたらめで、何がなんだかわからないことを書いてある 4」と批判をしたり、また試合内容を踏まえ「二度と再びかうした白熱的接戦の野球試合=全盛時代は樺太に来ないであらう5」や「この試合は、豊原の野球フアンは、どんなに面白かつたか知れない…樺太野球もまんざらバカにしたものでもない 6」などといった述懐や批評を随所で行っている。

#### まとめにかえて

『樺太野球史』は樺太における野球史全体をカバーするものではないが、樺太で実際に野球を行っていた小野による体験的な樺太野球史が記述されているといえよう。『樺太野球史』に記述される試合や批評、批判、述懐を整理することによって、樺太野球の歴史的展開に関する試論的な把握ができると考えている。

#### 脚注

- 1. 会田理人「『樺太日日新聞』掲載樺太実業団野球関係記事:目録と紹介」『北海道開拓記念館研究紀要』第40号、2012年、pp. 183-198。会田理人「日本領南樺太の実業団野球大会」『北方地域の人と環境の関係史 研究報告』2015年、pp. 177-200。会田理人「全道樺太実業野球大会」『北海道博物館研究紀要』第3号、2018年、pp. 67-77。
- 2. 『秋田魁新報』には小野庄次郎による寄稿が1930年1月から1931年12月にかけて計63回確認することができ、「秋商野球部」や「在樺太」と紹介が付されているものもある。
- 3. 小野庄次郎『樺太野球史』1940年、p.11。
- 4. 同上、p. 225。
- 5. 同上、p. 88。
- 6. 同上、p. 188。

## 『広報ところ(通信)・きたみ』にみるローカル・アイデンティティーの分析 —「竹ぼうき」時代のカーリングから「ロコ・ソラーレ」へ—

山村 洋子(北海道大学大学院)

#### 1. 研究目的と方法

本研究はオホーツク地域(常呂町、合併後は北見市)における身体文化を通じて、ローカル・アイデンティティーがどのように形成されるのか、近年、盛んとなったカーリングのケースを通じて明らかにする。具体的には北海道カナダ協会がカーリング指導者講習会を開催した1980年からロコ・ソラーレ北見が社団法人化する2018年9月までを対象とし、オホーツク地域におけるカーリング実践と地域の人々との有り様の分析を試みた。分析に用いた資料は1980年3月号~1997年3月号の『広報ところ』、1997年4月号~2006年3月号の『広報ところ通信』、1983年2月号~2018年9月号の『広報きたみ』である。加えて、常呂カーリング倶楽部のA氏、北見カーリング協会北見支部のB氏、(財)北見市体育協会のC氏、大学でスキー部を指導しているD氏、ロコ・ソラーレ北見のスポンサー企業である(株)アルゴグラフィックス代表取締役会長兼CEOである藤澤義麿氏へのインタビュー調査の結果を踏まえている。

地域のスポーツ活動については、トップアスリートを産み出すことを通じて地域を活性 化させる試みがあるということや生涯スポーツと人々の健康や住民の繋がりの関係につい てこれまでしばしば言及されてきている。またカーリングについては長野五輪における軽 井沢市と御代田町の取組に関する研究は存在するが、北海道北見市に関するものはこれま で詳細になされてきていない。

#### 2. 1988 年以前のカーリング (1980-1988)

『広報ところ』、『広報ところ通信』には常呂町のカーリングの黎明期の様子を含む、カーリングに関する記事が合わせて 454 記事存在する。常呂町でカーリングが始められた当初は誰にでもできる手軽なスポーツとして人気を博したが、道具が高価であったため、ガスボンベやビールのミニ樽にコンクリートを詰めたものが代用品とされていた。常呂町にカーリングを普及させた小栗裕治氏が長靴を履き、竹ぼうきを手にしている姿が『Canadian Curling News』1983 年 10 月号の表紙にある。カナダとの交流は技術の伝播だけではなく、日本国内初のカーリングホールを建設する際にはカナダのカーリングホールが参考にされた。1988 年にカーリングホールが完成すると常呂町のカーリングは急速に発展した。

#### 3. 「ロコ・ソラーレ北見」の成立(1988-2018)

一方『広報きたみ』に掲載されたカーリングに関わる記事は、常呂町を含む3町と市町村合併した2006年4月までに13記事、その後2018年9月まで170記事ある。「ロコ・ソラーレ北見」というチームが誕生する以前から、初心者カーリング教室の案内やオリンピックに出場する選手の記事は多数存在していた。また、聞き取り調査から河西建設カーリングホールでの活動が明らかになった。常呂自治区のような大規模な実践ではなかったが娯楽としてのカーリングはたしかに存在していた。

#### 4. 分析結果

以上の時代の広報における分析結果からカーリングを通じた常呂町および合併後の北見市におけるローカル・アイデンティティーは次のように特徴づけられる。

『広報ところ』、『広報ところ通信』では参加者が一体感を得られる町のカーリング実践

についての記事が目立ち、今日のようなカーリングを五輪の遺産と結びつける発想は主流ではなかった。特に、トップアスリートの活躍を扱う記事はオリンピックレガシーに資するものというよりも、閉鎖的な地域の活性化への貢献に焦点が当てられ、生涯スポーツとしてカーリングを扱う記事も、健康的な生活を送れるよう地域を改善しようとする意識に過ぎないものであった。常呂町出身のオリンピック選手がメディアで紹介されると町外の有識者の町に対する評価やカナダとの交流が「カーリングの町ところ」の実践を後押しすることにつながったが、カナダとの交流は2つの都市が点で結ばれた国際交流の延長に過ぎず、グローバルな展開と考えられていたわけではなかった。

一方『広報きたみ』からは 1980 年代から健康や生涯スポーツを意識した講習会が開催されていたことが分かった。そしてトップアスリートを紹介する記事が増加するがそこでもなお、オリンピックレガシーに言及されているわけではない。一般市民にとってカーリングは確かに「カーリングのまち」としての地域の自負を高めるものであったがカーラーは町の名士としての存在に留まり、オリンピックレガシーとしての注目は 2018 年冬の平昌五輪以降であったと言える。

また 1988 年以降『広報ところ(通信)』『広報きたみ』のいずれにおいてもトップアスリートに関わる記述は見られるが、カーリングの面白さに関する記事は競技が高度化されて以後も一貫して叙述され続け、競技性の高度化がカーリングの面白さを増したというよりも、それぞれの時代のそれぞれの楽しみ方に特徴があったことが重要であると分析できる。

#### 結論

『広報ところ』『広報ところ通信』『広報きたみ』の分析には共通性と相違の双方が見られた。カーリングの楽しさはなおも、町民を繋ぐ重要な意識として残り続けている。また、「カーリングは全員がコーチで全員が選手」と北海道のスキー指導者が述べている。確かにカーリングの日本代表はチームというカーラーの単位がそのまま代表チームに移行する。このことは地域のアイデンティティーとカーリングがいかに深い関係にあるかを物語っている。これらの分析は地域とスポーツとの関係に際して示されてきた幾つかの先行研究の指摘には見られなかったスポーツを介したローカル・アイデンティティーの構築の有り様に新たな視点を提示している。すなわち、ヘニング・アイヒベルクがデンマークの民衆学校の中にみる「コミュニケーションについての恒久的なユートピア的ビジョン」は身体民主主義を介して「社会的相互作用に目的を置く」と述べていることと深く関わっているように思われる。

#### **『資料 · 参考文献** (資料は一部抄録として記載することにとどめ、当日配布の資料で提示致します。)

- 1.アイヒベルク・ヘニング『身体文化のイマジネーション』清水諭訳、新評論、1997年。
- 2. Eichberg, Henning, Bodily Democracy: Toward a Philosophy of Sport for All, London and New York, Routledge, 2010.
- 3. 浅川和幸「『地方消滅論』と小規模自治体の活性化のあり方を考える―西興部村の若き 担い手の調査をとおして―」『北海道大学教職課程年報』(5) 北海道大学、2015年。
- 4. 石坂友司「オリンピックが創出したカーリングの町とネットワーク―カーリングの聖地・軽井沢/御代田の取り組み―」石坂友司・ほか『オリンピックの遺産と地域に与えた影響に関する社会学的研究―長野オリンピック(1998 年)を題材として―』関東学園大学、2011 年。

1930 年代初頭における府県体育協会の設置:「内務省-府県体制」に着目して

尾川 翔大(日本体育大学スポーツ危機管理研究所)

#### はじめに

1930 年代に入ると体育運動審議会や体育運動主事会議を通して、スポーツ政策は奨励 や統制などの意図が込められて様々な対象に展開されていった。その一つは、これまでの 研究によると 1930 年代初頭に府県体育協会の設置という形で地方へ広がり、その駆動力 は文部省にあるとみなされている。こうした研究では、この時期の文部省によるスポーツ 政策が地方に浸透する脈絡として府県体育協会に着目しているといえるだろう。

だが、戦前の地方制度は、中央において地方行政を統括する内務省と地方において府県 行政を統括する府県をセットにして制度が組み立てられていた。これを「内務省ー府県体制」としよう。ならば、1930年代初頭、地方にスポーツ政策が浸透していくプロセスを辿るときに内務省の存在は看過できるものではない。実際に、府県体育協会の会長の多くは知事や学務部長であり、これらの地位に就くのは内務官僚なのである。

そこで本研究では、「内務省-府県体制」に着目しつつ、1930 年代初頭における府県体育協会の設置を検討することを通して、地方にスポーツ政策が浸透していく原動力と府県体育協会の性格を浮き彫りにする。

#### 1. 「體育運動ノ合理的振興方策」と地方スポーツ政策

1930 (昭和5) 年7月8日、文部大臣諮問機関の体育運動審議会の第3回総会が開催された。この日の審議会では、「體育運動ノ合理的振興方策」が満場一致で可決された。「體育運動ノ合理的振興方策」は、5つの方針と10の要項を柱として「官民關係者ハ互ニカヲ協セ…方針並ニ要項ニ準據」することを求めるものであった。

「體育運動ノ合理的振興方策」の「要項」の1つには、「體育運動行政機關ノ整備ニ關スル事項」が挙げられている。具体的には、「一、文部省ニ體育局ヲ地方廳學務部ニ體育課ヲ置キ大都市ニモ之ト同様ノ事務系統ニ於テ體育ノ部局ヲ設クルコト」と、「一、文部省ニ體育官ヲ置キ地方廳ニ體育運動主事(地方待遇職員令ニ依ルモノ)ヲ置クコト」である。この2つの「要項」は、各スポーツ団体の統一機関や各府県の体育協会を設置するための重要な要素になってくる。前者では、一方で文部省体育課を体育局とすることで文部省自体の行政規模の拡大が望まれているが、他方で「地方廳學務部」は文部省ではなく内務省の管轄であることから、「地方廳學務部」に「體育課」を置こうとすることは地方の体育行政が内務省の管轄下に置かれることを意味している。後者では、一方で「文部省ニ體育官ヲ置」くことは文部省のポストを増やすことであるが、他方で「地方廳ニ體育運動主事ヲ置ク」ことは「地方廳」が内務省の管轄にあることから、体育運動主事が内務省の管轄に置かれることを意味している。このようなことから、地方スポーツ政策は内務省を経由することなしに具体化することは困難なものであり、そのことは「地方廳」に言及している文部省もある程度の理解をしていたのではないだろうか。つまり、地方における「文部の仕事が内務の出店と云つてよい地方廳に發生してるが如き」状況なのである。

#### 2. 体育運動主事の官制化

地方スポーツ政策を進めていこうとするとき、その担い手になるのは体育運動主事であ

る。しかし、1920年代の体育運動主事は官制化しておらず、行政機関に属する立場になかった。こうした事情から、体育運動主事会議では、毎年のように体育運動主事の官制化を求める建議が繰り返されていた。しかし、例えば、1928(昭和 3)年 12 月 5 日から 8 日まで開催された体育運動主事会議においても、なお、「毎年重要問題トシテ提出サレタル本件實現ノ迅速且ツ確實ヲ期セラレンコトヲ望ム旨申合セ」されるに止まっていた。体育運動主事の官制化に反対していたのは内務省であり、そこでの問題は予算であった。

こうした状況が一変するのは、1929(昭和 4)年 7 月 2 日に小橋一太が文部大臣に就任してからである。小橋は、内務官僚や政治家として顕著な経歴を持っている。小橋は、「社會教育振興、體育獎勵、精神作興の三項を教育行政の目標として進んでゐるが昭和五年度豫算にもその一端を現わさん」とした。結局、1930年度の「體育獎勵費」は大蔵省の裁定で10万円とされた。ここで獲得された予算は、地方スポーツ政策に組み込まれ、予算の問題で体育運動主事の官制化に反対していた内務省を説得する材料になっていく。そして、小橋と共に地方スポーツ政策を進めるのは、1929(昭和 4)年 10 月 9 日、小橋の人事権によって体育課長に就任した山川建である。山川は東京帝国大学法学部を卒業し、内務官僚の経歴を持つ人物である。山川の体育運動主事の官制化に関する「内務省及法制局等との絶へざる、而してうまざる接渉の結果」、1930年8月8日、「勅令第一四七號」において体育運動主事の官制が公布された。これによって、体育運動主事は、「技術の人であると共に體育行政の人であるべき事が如實に示された」のである

#### 3. 府県体育協会の設置とその実相

府県体育協会は、1930年以降に26府県に設置され、1932年の2月には44府県にまで及んでいる。この時期に設置されていった府県体育協会は、「文部省の援助により出來上がった急造團體である。もつと言いつめれば文部省體育獎勵金の交付を受ける爲に組織された體育團體」なのである。

1930年以降、府県体育協会の設置にあたって実際に奔走したのは体育運動主事である。例えば、千葉県体育協会の発足には体育運動主事の渡部重一郎が中心となって準備された。また、和歌山県における「尾城丑太郎体育主事の任命は県体育協会の創立が大目的であった」とされている。こうした府県体育協会の設置には、福井県体育協会の場合、体育運動主事の伊達洋造によると「県学務部長水原信一・県知事齊藤直橘の了解」が必要であった。大分県では、宮崎圭次郎が体育運動主事任命されて体育協会の設置に奔走したのだが、それは「学務部教育課が主導する指導機関」であった。加えて、島根県では1924(大正13)年に体育協会が設置されていたが、体育運動主事の園山亀蔵は、「體育運動ノ合理的振興方策」を機として「体育運動団体の統制に乗り出した」と回顧している。

#### おわりに

内務官僚の経歴をもつ小橋と山川がスポーツ政策を主導し始めてから地方スポーツ政策が進み始め、彼らによる大蔵省、内務省、法制局との交渉を経て体育運動主事が官制化した。無論、府県によって実相は様々であるが、府県体育協会の設置には、実働部隊としての体育運動主事の取り組みがあり、そこで実際に権限を持っていたのは内務省関係者であった。このようなことから府県体育協会は、内務省の権力やネットワークを原動力として設置されたものであり、内務省の外郭団体とでもいうべき性格を備えていたとみなせよう。\*参考文献および史料の詳細は当日配布の資料にて示すこととする。

「拡大的アスレティシズムに関する研究ー労働者階級の包摂とボーイスカウト運動」 石立克己(北海道大学大学院)

#### 本発表の目的

本発表は、19世紀後半から 20世紀初頭の英国を席巻したアスレティシズムと呼ばれる中産階級の教育イデオロギーの労働者階層への伝播とその包摂について論じるものである。これまで、日本における、この時期の英国スポーツに関する研究は集団スポーツとエリート教育、帝国主義の観点から論じられてきた。しかしながら、英国民の大多数を占める労働者階層の教育とアスレティシズムの関係について十分に議論されてきたとは言い難い。加えて、英国における先行研究も、アスレティシズムに基づく教育と軍事、帝国主義の関係性に注目するあまり、その国際的な影響力や、第一次大戦後の国家間の協調を重視する時期との連続性について十分に論じられているとは言えない状況である。

よって、本発表では労働者階級へのアスレティシズムの拡がりを、中産階級による教育思想の定向伝播と捉えるのではなく、文化へゲモニーの観点から分析したいと考える。その際、アスレティシズムによる労働者階級の包摂を単に帝国主義思想の労働者階級への普及過程としての側面、あるいは国家への奉仕という犠牲の精神としての側面に注目するだけでなく、より普遍的な概念として変容したのはなぜかという点についても論じていく。なお、引用・参考文献と史料は、紙幅の都合上、発表当日の資料で提示する。

#### 先行研究

以上の研究目的を遂行する上で、Colm Hickey と Colm Kerrigan、Wray Vamplew の間で行われた議論は示唆的である。Hickey は労働者階級の教育を担った初等学校におけるアスレティシズムについて論じ、労働者階級に拡大したアスレティシズム(Adapted Athleticism)の存在を示した。その一方で、Kerrigan は史料実証主義的手法を通じて、Vamplew は、数量経済史的手法を通じて、アスレティシズムが介在した可能性を否定した。これらの主張に対して、Hickey は戦没者として讃えられた教員たちの記事を下にアスレティシズムの影響は確かにそこに存在したと論じた。

上記の Hickey の反論は、平田が「客観的な「現実」から「言説」を重視する姿勢」への転換と述べた、帝国史を巡る方法論上の変化を反映したものであると言える。すなわち、Hickey は英国における帝国主義思想の強化と変容における労働者階級の影響力を査定する際に、物理的、経済的な面よりも、不可視的な民衆感情・心性を捉えようとし子どもの能動的な側面を強調する。本発表はこうした「下からの原動力、特に労働者階級によって形成されたアスレティシズム」としての側面を文化へゲモニーの観点から提示することを目指すという意味で、Hickey の用いる"Adapted Athleticism"概念に依拠する。言い換えれば、文化へゲモニーの観点から、アスレティシズムの問題を捉え直すことに等しい。加えて、「拡大的アスレティシズム論」に依拠しつつ、その文化的媒介としてのボーイスカウト運動に着目することで、本発表においてボーイスカウト運動が鍵概念となることを以下に示していきたい。

#### ボーイスカウト運動

阿部生雄は「イデオロギーは 100 パーセントの同質性を伝播することはない」と述べ、日本における英国スポーツ教育思想の伝播が単なる模倣ではなく、その文化的「翻訳」を通して行われたと論じている。アスレティシズムの労働者階級への伝播もまた、中産階級の概念や流儀がそのまま伝授されたわけではない。加えて、アスレティシズムの影響は学校教育の場を超えた。ポスター、「帝国の日運動」、課外のスポーツ活動、読本や新聞もまた、労働者階級の包摂に関わった

と Hickey は述べている。

とりわけ、学校教育現場の外で、学校教育と連携をした「青少年教育」の存在は重要である。特に、英国における労働者階層の「青少年教育」を考える上で、1907年に始まり、今日世界最大規模の青年運動にまで成長したボーイスカウトの役割を無視することはできない。学校教育とは異なり、その活動や参加に子どもたちの自主性が深く関わるボーイスカウト運動は「下からの原動力」を描くうえでも重要な視座を与えてくれる。また、ボーイスカウト運動の特殊性は、英国やその植民地諸国に留まらず、時には英国に敵対する国家においてもその手法が採用された世界的な活動であったという点にある。

このボーイスカウト運動の国家横断的な側面は、「帝国史と国内史の分離」に対する批判から生じた「新しい帝国史」を志向するイギリス帝国史研究の影響を受け、近年注目されている。例えば、Nelson R. Block、Tammy M. Proctor 編 Scouting Frontiers Youth and the Scout Movement's First Century や Scott Johnston によるカナダボーイスカウト史研究では、ボーイスカウトの創始者、ベーデン=パウエルやスカウト本部に従順なだけではなかった植民地におけるボーイスカウト運動の独自性が明らかにされた。「新しい帝国史」の下でのボーイスカウト史研究によって、ベーデン・パウエルというカリスマの絶対的な権力の下での労働者階級、大英帝国の善導というボーイスカウト運動に関する物語は見直されつつある。こうした新たな研究は大英帝国内植民地が英国本国からの一方的な植民地支配という構造によって形成されたものではなかったことを見直す上で重要である。

ボーイスカウト運動は、帝国主義的イデオロギーを労働者階級に伝播する装置でありながら、同時に国民国家という単位を超えたグローバルな活動としても成立しえた。発表者は、この二面性にこそボーイスカウトによるアスレティシズムの包摂を論じる意義があると考える。つまり、アスレティシズムという教育イデオロギーは19世紀のパブリック・スクールの理想、第一次世界大戦の悲劇を生み出した思想でありながらも、アスレティシズムの変質を論じてこそ、その全容を真に示すことができるのではないかと考える。以上のことから、以下のようにスカウト運動の分析を通じて本発表の目的は達成されよう。

#### スカウト運動の分析

初めに、1908 年版から 1924 年版までの Scouting for Boys を通して、ボーイスカウト運動理念の変遷を追う。その中で、「国家主義から国際主義へ」の転換とされた第一次世界大戦終戦前後のボーイスカウト運動について検討する。ここでは、戦前に一貫して強調され続けたボーイスカウトの帝国主義的側面と大戦後の国際協調主義の併存について述べていく。

次に、雑誌 *The Scout* 内における問答集 "Round the Campfire"をもとに、階層縦断的かつ帝国内での性別、地域横断的な活動としての初期のボースカウト運動に注目し、アスレティシズムが文化的に「翻訳」される過程を追う。Sam Pryke や Colm Hickey、Michael Rosenthal らの研究にみられるようにベーデン・パウエルやスカウト本部による出版物のなかには帝国主義と一体となった「男らしさ」を重視する記述が多分に見られる。しかし、編集者とスカウト達の間で交わされる問答からは、パブリック・スクールにおけるアスレティシズム教育とは異なった「スカウト」像が顕わになる。こうしたボーイスカウト運動におけるアスレティシズム概念の変化は "Scout is Friend of All"の概念とも関わり、アスレティシズムによるイギリス国民全体の包括を語る上で重要である。

以上のまとめを通して、アスレティシズムによる労働者階級の包摂が単に帝国主義思想の労働者階級への伝播や国家の為の犠牲の思想であるに留まらず、第一次世界大戦後の国際秩序へも影響を与えた点について一定の見解を提示して括りとする。

## 1964年「東京五輪おどり」に関する検討 -花柳秀による振付の経緯と踊りの再現を中心に-

伊東佳那子(中京大学大学院)・來田享子(中京大学)

#### 1. はじめに

1964年の東京オリンピック開催前には、オリンピックを記念して様々な楽曲が制作された。その中で、歌手の三波春夫によって唄われた「東京五輪音頭」「東京オリンピック音頭」「東京五輪おどり」には、日本の伝統的な身体文化である「盆踊り」に類する振付がなされた。本研究は、このうち東京母の会連合会によって制定され、当時のテイチクレコード株式会社より発売された楽曲である「東京五輪おどり」の振付に着目する。振付の担当は、日本舞踊花柳流の花柳秀氏であったことがジャケットに記されている。さらに、歌詞カードとは別に、振付を絵と言葉で説明した振付カードが同封され、レコードを購入した人が楽曲と共に踊りを楽しむことができるようになっていた。調査を行ったところ、当時の映像保存技術の未成熟さのため、踊りの全容を確認できる映像は現存していないと考えられた。なお、従来の研究では、「東京五輪おどり」をはじめ、その他の楽曲の踊りについて検討したものはみられない。

そこで本研究では、「東京五輪おどり」の振付を行った花柳秀氏へのインタビューを試み、「東京五輪おどり」の踊りの全容について、それが作成されることになった経緯も含めて描き出すことを目的とした。また、この研究目的を達成するために、花柳氏の稽古場に所属する弟子の協力を得て踊りの再現を行ってもらった。インタビューは、以下の3点を柱に半構造化して実施し、花柳氏の許可を得て、音声および映像を記録した。

- (1)東京五輪おどりの振付を行うことになった経緯や背景
- (2)東京五輪おどりの踊りはどのような場所で行われたのか
- (3)振付の意図やオリンピックに向けて考慮した点

本研究により、1964年時点の踊りの完全な映像がない中で、これを再現する映像を記録し、1964年東京大会の存在を広く市民に伝えるための方法として、盆踊りが用いられることになった経緯の一端を明らかにすることができる。

#### 2. 結果

#### 2-1.「東京五輪おどり」振付の経緯

インタビュー調査から、花柳氏への振付依頼は、オリンピック開催前に行われた踊りの 選考会がきっかけとなったことが明らかになった。この選考会とは、東京都の体育館で行 われ、様々な人が考案した「東京五輪おどり」の振付を東京母の会連合会のメンバーや都 の職員に向けて披露するものであった。花柳氏(当時 30 歳)は、連合会のメンバーであっ た母親に付き添い選考会を訪れた。そこで、知人に声をかけられ、急遽踊りを披露するこ とになった。花柳氏によれば、その選考会で披露した踊りは即興であった。この即興で披露した踊りが採用され、花柳氏が正式に振付を担当することとなった。

選考会にて披露された踊りに対する連合会のメンバー等の評価を花柳氏は記憶していた。 「とてもまとまってるし、輪が動いてくるし、中にも入るし外へも出るし、外へ出たとき に見ている人に顔がみえるし、移動があっていいという。大勢で踊るから居所ばっかりで 踊ってない、移動しないと見ている人がつまらない。」この語りからは、「東京五輪おどり」 の踊りは、大勢で踊ることが想定されており、また隊形の移動や変化にみられるような見 た目の華やかさが求められていたことがわかる。

#### 2-2.「東京五輪おどり」の普及活動

花柳氏は、東京オリンピック開催の1年前から、自身が振付した「東京五輪おどり」の 踊りを教えるために近隣の小学校を巡回した。この活動は、オリンピックが日本に来るこ とを周知する目的で行われたという。しかし、こうした活動に対して、小学校の反応は様々 であり、勉強を優先する意向を示し、活動を拒否した小学校も存在した。このような反応 からは、活動だけでなく、オリンピックに対する考え方や理解の違いが影響していた可能 性、当時の状況がうかがえる。

#### 2-3.「東京五輪おどり」振付の意図

花柳氏は、選考会にて披露した踊りをもとに振付を完成させた。その際、花柳氏は「東京五輪おどり」の唄の特徴から輪踊り(盆踊りのように踊り手が輪をつくってまわりながら踊るもの)が適していると考えた。この輪踊りには、その場に停滞せず前に進むことを意識した振付が成された。さらに、花柳氏は、振付について次のように語った。「難しかったら通用しないっていうこと。派手であったほうがいいと、外人も来るんだから。」つまり、花柳氏は、東京オリンピックに多くの「外人」が来ることを想定し、誰でも簡単に踊ることができる振付を考えたことがわかる。

再現された踊りからは、一連の踊りを繰り返す、いわゆる盆踊りの要素を確認することができる。また、歌詞に沿った振付(例えば、「空は晴れたよ」という歌詞に対しては空を見上げるような振付)もみられた。これらは、人々が親しみやすく、簡単に覚えることができる工夫の一つであったと考えられる。

#### 3. まとめ

本研究では、1964年の東京オリンピックのために作られた「東京五輪おどり」の踊りの全容を再現し、その振付が決定するまでの過程の一部を聞き取り調査によって明らかにした。検討の結果、「東京五輪おどり」の踊りを決める選考会により、花柳氏が正式に振付を担当することになった経緯、振付の意図とともに、この踊りが大会を周知するための活動としても活用されたことが明らかになった。またこの踊りは、大会に訪れた外国人選手や観客がともに踊ることも意識されていた。

花柳氏が考案した振付は、一般大衆に馴染みの深い盆踊りに多くみられる輪踊りであった。この形式の踊りを採用したことにより、オリンピックの存在を日本人にとって馴染みのあるものにしようとする意図と同時に、海外に日本の伝統文化をアピールすることが意図されていたと考えられる。

本研究には、当時の組織委員会における「東京五輪おどり」の扱い、踊りが実際にどのような影響を人々に与えたか、「東京五輪おどり」以外の振付に関する検討など、残された課題がある。これらについては、今後の発表者の課題としたい。

明治初期・都城縣『小学館一巻』(明治5年)にみる体操関連史料記述 一学制公布前後の時代における郷校(都城縣)の課目・体操一

○榊原浩晃(福岡教育大学) 田端真弓(大分大学)

#### 緒言(研究の動機、先行研究の検討及び本研究の目的)

『重訂英国歩兵練法』等の和綴本が鹿児島県立図書館に所蔵されているという知見を得てから20年以上経過した。その間、榊原はイギリス体育史研究に従事し、1870年以降の初等学校の教科体育に関する研究を主たる研究対象に据えてきた。イギリスのmilitary drill に関する指導書の和訳本が鹿児島藩蔵版『重訂英国歩兵練法』(慶応三年)にあたる。先行研究としては、近代黎明期の鹿児島藩・縣の体操実施について、ローカル・アイデンティティとみなされるように地方体育史研究として発表した内容が、Hiroaki Sakakibara, Gymnastics and Modern Education in Kagoshima from the Closing Days of Tokugawa Regime to the Early Meiji Era in Japan であり、大久保英哲先生編集の ISHPES セミナー報告書(英文)にも載せていただいたことがある。さらに、東京大学史料編纂所の島津家文書を主たる史料として学制公布前の鹿児島県における體操実施と地方行政を研究したものが、竹下・榊原の『体育史研究』所収の論文であった。本研究はそれらとの連関を有し、明治初期の地方体育史研究に位置づくものである。すなわち、都城縣『小学館一巻』(明治五年)にみる郷校(都城縣)の教育事情と体操関連事項の史料記述を追い、学制公布前後の時代における課目(科目)としての体操について考察することを目的とした。

#### 1. 鹿児島縣と都城縣をめぐる地方行政の位置

幕末期に都城は薩摩藩(鹿児島藩)に属しており、明治四年の廃藩置県により、一旦鹿児島縣となったが、同年十一月に改置府県(三府七十二県一使)により都城縣が誕生した。大淀川以南の日向地域と大隅半島の六郡(始羅、肝属、囎唹、大隅、菱刈、桑原)を擁する都城縣となり、地理的には大隅半島のほぼ全域と宮崎県南部がそれにあたる。参事には桂久武が任命され、明治五年二月十六日鹿児島を出立した。桂は翌日都城に到着し、早速、地方行政機構の整備と県官吏の配置を行った。半月あまりを経過下した後、同日記には、興味深い史料記述が存在する。旧暦二月卅日は、新暦4月7日である。「二月卅日 曇 一、此朝平川民五郎参侯、友野太郎ニも被参、掛時計学校出張所江致持参侯、一、定刻出仕、一、退出掛仮学校江鳥渡参侯処體操央ニて致見分侯、」(『都城縣在勤日記』明治五年二月卅日)とある。それ以降旧暦の明治五年三月八日から十一月十九日までの文書綴りが『小学館一巻』である。

#### 2. 史料 都城縣『小学館一巻』(明治五年)について

歴史文書の記述を確認する必要があり、史料翻刻と解釈の研究手法は、幕末・明治期を研究対象とする場合、避けて通れない。この点、共同研究者の田端真弓の助力を得た。本研究の主要史料である『小学館一巻』は、当時の都城縣の種々の地方教育行政文書を1文書ずつ山折りにし、時系列順に綴じられているものである。小学館は鹿児島縣でいう本学校に相当するもので、都城縣においては機能的に中心的位置を占める教育機関(小学校)であった。合わせて教員派遣、指導書の発行など教育行政の中核を担っていた。

#### 3. 郷校の課目と教育概況

学制期以降の郷校(学制公布後の変則小学校)における学科課程は、「読書」「手習」「数学」に大別整理されていたが、学制公布直前の郷校では鹿児島縣に倣って、漢学(支那学)、算術(洋算)、体操、剣術の各課目が設けられた。教える立場の官吏は、師員、世話方、掛などの表記で示され、職位は一等教授、二等教授、三等教授、四等教授、助教寄の官職が設定されていた。学制公布前後の時代の郷校及び(変則)小学校の生徒は、年齢にして「庁下士族男子七、八才より十八才まで」を対象としていた。

- 4. 体操関係の史料記述 (発表当日、史料を精査した内容を提示いたします。)
- (1) 郷校への体操師員派遣要請及び体操師員の任命
- (2) 体操実施場所・体操場及び体操器械
- (3) 沼津兵学校(同付属小学校)の体操との関係及び郷校における教練

#### まとめにかえて

この研究では、学制公布前後の時代における地方史料の存在や体操の先行実施の地方的特色を跡づけることだけに終始しない。なぜ、学制公布前の近代教育黎明期にそのような体操実施やその実施のための条件整備に当時の縣官吏の関心が向いたのかの考察をも必要とするからである。体操用語の使用の経過・定着とそれらの歴史的意義についても考察の余地がある。

史料記述から我々は何を読み取るべきであろうか?その考察の深さが、まさに地方(体育) 史研究の方法論の提示にせまることにつながると考えたい。当時の郷校師員に体操についての知見が皆無で、対策として何も講じようともせず、近代教育の黎明期が始まっていたなどということではないのである。体操が課業(課目)として必要であり、指導できる教師(師員)を確保することは地方の緊急性の高い要望であったとみられる。 鹿児島縣に倣って、沼津兵学校、同付属小学校で実施されていた体操内容(石橋訳『体操書』)あるいは、英国歩兵練法に記載された運動様式による戸外での教練や体操実施がなされていた背景も存在した。体操は、戸外で教師の号令に倣って行動する様式を身につける内容であったことが想起される。広範囲に鹿児島縣及び都城縣下では、既に『重訂英国歩兵練法』に基づく教練も計画され、地方の常備隊での訓練として実施されていた。常備隊での英国式教練と郷校での体操実施の因果関係が存在したのである。 鹿児島県下では、軍隊予備教育的な常備隊や社会教育的な郷中教育の下地が存在したからこそ、学制公布前に体操実施がなされていったと考えられる。 ゆえに、先学が熱心に追究されてきた陸軍体育史研究の必要性は現代の我々の研究の進展にも通じている。

#### 【史料・文献一覧】 (その一部)

- (1)桂久武、『都城縣在勤日記』明治五年、都城歷史資料館
- (2)都城縣、『小学館一巻』、明治五年、和綴本、宮崎県庁
- (3)Hiroaki Sakakibara, Gymnastics and Modern Education in Kagoshima from the Closing Days of Tokugawa Regime to the Early Meiji Era in Japan —With Reference to the Influences of External Pressure and the Construction of Local Identities —, Okubo, Hideaki edit. Sport and Local Identity (6th ISHPES Seminar, Kanazawa, Japan): ISHPES Studies, No.11. 2004, pp.386-392. Academia Verlag
- (4)竹下幸佑・榊原浩晃、「明治初期鹿児島藩・県における体操実施に関する史的研究」『体育史研究』第 25 号、日本体育学会体育史専門分科会、平成 20 年、pp.15-27.
- (5)井原政純、『わが国における近代小学校の成立過程―鹿児島県の郷校・小学校の研究―』、 和田印刷、平成12年
- (6)都城市史編さん委員会編、『都城市史』史料編近現代1、都城市、平成12年

### 昭和4年ヘルセットの指導によるスキージャンプの向上 新井 博 (日本福祉大学)

#### はじめに

昭和3年のオリンピック・サンモリッツ大会で惨敗後、翌年へルセットの指導によって昭和7年のオリンピック・レイクプラシッド大会ではジャンプ の8位を筆頭に10位代に数名入る好成績を上げた.次のガルミッシュ大会では全体で精彩を欠いたが、ジャンプでは独り伊黒正次が7位に入り、ジャンプだけは戦前世界の上位の迫る躍進をとげた。ところが、ヘルセットのジャンプ指導について触れたものはない。そこで、対象の時期を、彼が来日する以前のジャンプについて第1期、また来日中のジャンプの巡回指導について第2期、帰国後のジャンプについて第3期として、ジャンプ技術、シャンツェ、飛距離を比較し、彼の如何なる技術とシャンツェに関する指導が飛距離を伸ばしたのか捉え、また昭和初期のジャンプ界に与えた影響を考えてみよう。

#### 1. 来日以前のジャンプ

明治 45 年に北大でドイツ語教師コラーが"Der Schi" (H.Hock,1906) を使ってノルディックスキー技術を紹介したことから学生が始めたが、ジャンプの実施は大正 3 年頃からである. 以後大正 12 年の第 1 回選手権大会までにジャンプが行われたのは北大スキー部だけで、"Der Schi"を基に練習を続けた. ジャンプは低い姿勢で加速して踏切台から跳び出し(サッツ)、体を起こした直立の姿勢を保ち、膝を前後にずらして着地した. シャンツェは初め雪を固めた簡単な台で、大正6 年に学生が初の固定シャンツェを建造し、大正7 年に北大が固定のシルバースロープを、大正11 年に大型のシャンツェを, 大正12 年に小型のアルファシャンツェを建造した.

大正 12 年からヘルセット来日までのジャンプ技術は、以前と変わらなかった。ところが、外国では大正 12 年以降、オスロのトーマス・タムスが「前かがみの姿勢のジャンプ」をみせエポックとなった。ジャンプは前方に体を投げ出すように強くサッツして、飛んでからも体の前傾姿勢を強めて着地した。昭和 2 年スイスのストラウマンは、選手が高く 50m 近く飛ぶ場合に着陸時に衝撃が大きく着地で立てず、タムスの前傾した低い飛行が航空力学に適っていることを立証した。

第1回選手権後各地域でジャンプが始められ、専門書『スキージャンピング』による熱心な練習が行われ、また大型シャンツェの建造で第6回選手権まで飛距離が向上していた。

#### 2. 来日中の巡回指導

ヘルセット一行は札幌 1/6-15, 小樽 1/15-17, 札幌 1/17-21, 大鰐 1/22-25, 高田 1/25-2/4, 長野 2/4-7, 赤城山 2/9-11, 2/15-17, 函館 2/19-20, 札幌 2/21-24, 稚内 2/25-26, 旭川 2/27-28, 札幌 2/28-3/3 を巡回して,シャンツェ修繕,ジャンプ指導,模範ジャンプ,シャンツェ建造,審判員,講演,講話,候補地探しを行っている.

ヘルセットは、「空中の抵抗に応じて空中では身体を常に直し前方へ前方へと身体をかがめていくように」として、タムス型のジャンプを指導した。彼はノルウェースキー連盟の副会長でタムス型を指導しており日本でタムス型を指導したのは当然であり、2選手はタムス型の前傾姿勢のジャンプを多くの選手や人々に披露した。彼は高田でスキーの感想を聞かれ「ディスタンスのテクニックは比較的良いが、ジャンプのサッツはなっていない、伴、神澤、村本の3君を除いて」

とまだタムス型ジャンプが出来ていないことを述べている.

彼はシャンツェについて、日本のシャンツェは山の斜面のままで「本来ジャンプ台のカーブは 非常に大きな直径の弧の一部とならなければならないが当地で見たのは非常に短い直径の弧の一 部である.・・・ジャンプ台を作るには・・・ジャンプ台のカーブに注意しなければならない」と 指摘している. これは、昭和元年ストラウマンのシャンツェ理論と同じであり、ヘルセットはタ ムス型で飛ぶシャンツェを指導していたのである. シャンツェの修理に関してジャンプ台の修理 が行き届いていないと指摘している.

彼らの指導で 1/14 第 2 回学生選手権大会(札幌),2/2 第 7 回選手権(高田),2/5 全日本スキージャンプ大会(飯山),2/10 第 1 回赤城山スキージャンプ大会,2/17 両殿下天覧ジャンプ大会,での飛距離が伸びて,条件を考慮しても大会ごとに選手たちの実力向上がみられた.

#### 3. 帰国後のジャンプ

昭和4年に7スキー団体・組織が、ジャンプに関する新たな事業予定し、同年の連盟代表委員会で新たに「ジャンプ競技規定ハ国際連盟スキー競技規定ニ於ケルジャンプ競技規定ヲ採用サレタシ」と提案されている.

昭和5年に4スキー団体が、シャンツェの加工・建造・ジャンプ大会・講習開催などの新たな事業予定し、同年の代表委員会にジャンプについて「6. ジャンプ採点法ヲ国際法トスルコト」など6つの提案がなされている。またシャンツェの研究が進み昭和5年に下平と土肥はストラウマンの論理を基に、タムス型のジャンプに合ったジャンプ台とランディングバーンの理想的な角度を数値化している。同年青森県大鰐の第8回選手権の飛距離は、昭和3年に同シャンツェで第1回学生選手権が行われた時より大幅に向上してる。

昭和6年9スキー団体が地方でシャンツェの加工・建造・ジャンプ大会・講習講演開催など新たな事業を予定し、また連盟の代表委員会に4つ提案がされている。昭和6年にジャンパーの技術は僅か2年間でタムス型をトップにした三段階のピラミッドが形成されていた。同年の第9回選手権では、大正15年の同シャンツェの飛距離を大幅に上回っている。また文部省は同6年からスキー普及のために「全国スキー指導者講習会」を開催し、「スキー指導要項」をテキストにした。ジャンプ技術はジャンプ台から跳び出し後強い前傾姿勢を強調したタムス型の技術を紹介し、シャンツェはストラウマンの研究を基にした昭和5年の下平廣・土肥栄四郎の論文で紹介したジャンプ台の角度とランディングバーンの角度を紹介している。

#### まとめ

第1期のヘルセット来日以前、ジャンプは北大スキー部だけで行われ、サッツ以後直立した姿勢で飛び着地した。雪のシャンツェから固定式へ、さらに大型シャンツェに変わったが、飛距離は約10-15mであった。第2期に、彼はサッツ後強く前傾した世界トップのタムス型のジャンプ技術とストラウマンのシャンツェ理論を指導し、トップ選手達は飛距離を伸ばした。第3期、彼の帰国後ジャンプの技術はタムス型が出来る選手が増えて、ストラウマンの理論を基にしたシャンツェ研究も進展している。ヘルセットは当時世界トップのタムス型のジャンプの技術とストラウマンのシャンツェ理論を根付かせ、世界トップに迫るきっかけを作る貢献をしたと言えよう。

## 陸軍戸山学校機関誌「研究彙報」と「体育と武道」の推移

木 下 秀 明(元日本大学)

1874(明治 7)年開校の陸軍戸山学校(以下「戸校」)は、1912(大正元)年の歩兵学校分立で、体操剣術専門の研修・研究機関となった。

その研究の蓄積は、戸校将校集会所発行「国家及国民の体育指導」(岡千賀松、1922)、「体育と体操の理論」(戸校編、1923)などの著書から推察できる。

そして、戸校は 1924 年から機関誌「研究彙報」を発行する。しかし、わずか 3 年で 1927(昭和 2)年には「体育と武道」と改称する。

#### 1.「研究彙報」

「研究彙報」(22cm×15cm)は、1924 年 8 月 (推定)から 1927 年 9 月まで年 6 回、戸校編集で偕行社(ほとんどの陸軍将校が加入した有志の組織)から発行された。

発行の趣旨は、以下の通りである(4、5、特別号表紙裏)。

- 一、本彙報は当校に於て研究実施のことを速に職員 一般に紹介し併せて職員相互の研究事項を交換 するを以て目的とす随て未た完全ならさると私見に 属するものなることは免れさる所とす
- 二、職員以外諸賢の御投稿を歓迎す

当時の大学では、学部や学科が研究発表の 機関誌を持つのが一般的であった。

本誌は、これを模して、客観・実証的な研究 発表と見解・主張・試案の類の論文を掲載する 研究誌を意図したのである。

ところが、8 号以降には「目的とす」の次に以下の文言が挿入された。

尚学校教練実施者の体育指導の一助にもなるへき事 項を輯録せり

この「学校」は、1926 年設置の青年訓練所である。

さらに、18 号末尾掲載の同誌最初の「広告」は、「体育武道に関する良参考書」を謳い、「陸

軍以外の申込」を数冊分の料金前納(1 部 25 銭)で受け付けると大書した。

本誌は、戸校職員対象の研究誌機能に加えて、青年訓練所指導者対象の手引書の機能をも担うことを意図したのである。

したがって、「研究彙報」という誌名は改称を 迫られる。

#### 2. 「体育と武道」

「体育と武道」(22cm×15cm)は、1927 年 11 月から1935年12月まで年6回、以後1937年6 月発行まで年4回、戸山学校編集で偕行社から 発行された。

本誌は「研究彙報」の後継誌であるが、誌名 改称ではなく、新規発刊の形で、彙報の20号相 当号を「創刊号」とした。

しかし、「改称」の理由は、以下の通りである(2号末尾「広告」)。

本年に至り購読者漸次増加し特に青年訓練の実施 に伴ひ国民体育の指導に直接関係ある本校を見学 する団体有志等益々増加するに至れり、而して九月 号青年訓練参考を出すや部外の購読者急激に増加 するに至りしを以て十一月号より『体育と武道』と改称 し広く購読者を求め体育武道の指針たらん事を期す

「研究彙報」機能の継承は当然であるが、新たに青年訓練の指導に資することを編集方針に加えたのである。

必然的に市販の専門雑誌類似の巻頭言・囲み記事・口絵などの工夫が加わる。

「体育と武道」としたのは、戸校教官が体操担当と剣術担当に二分されていたからであろう。

本誌の発行は、1937年7月の日中戦争勃発による動員(原隊復帰)で不可能となる。

#### 3. 満州事変の影響

「体育と武道」は、青年訓練所設置以上に1931年9月に始まる満州事変に影響される。

「剣術教範」は、満州事変を理由の一つに、 事変勃発から僅か2年8ヵ月後の1934年5月 に改正された。

改正作業は戸校担当であるから、事変の影響 は「体育と武道」にも及んだのである。 満州事変後について機関誌総目録作成中の 印象から指摘できるのは、剣術教範改正につな がる新規の実験・研究を含む剣術記事の増加 と、剣術有効論の顕在化である。

発表では、その実証を試みる。

## 戸山学校機関誌一覧表(発表者収集分)

凡 例:数字:保管中、 斜体数字:コピー、 丸囲み数字:欠本(後続号「既刊目次」にあり)、 □:欠本 備 考:村岡安様のご尽力と小早川(駒田)順市、佐々木清雄、板野逸治、村岡安各位のご厚意により収集

| 「研究彙報」      |            | 「体育と武道」 |            | 29     | 1932.06.25 |
|-------------|------------|---------|------------|--------|------------|
| 発刊番号        | 発行年月日      | 発刊番号    | 発行年月日      | 30     | 1932.09.16 |
| 1           |            | 1       |            | 31     | 1932.11.16 |
| 2           |            | 2       | 1928.01.15 | 32     | 1933.01    |
| 3           |            | 3       |            | 33     | 1933.03.15 |
| 4           | 1925.02.20 | 4       |            | 34     | 1933.05.10 |
| 5           | 1925.03.30 | 5       | 1928.07.10 | 35:特別号 | 1933.06.15 |
| 特別号         | 1925.06.15 | 6       | 1928.09.28 | 36     | 1933.09.10 |
| 6           | 1925.08.15 | 7       |            | 37     | 1933.11.10 |
| 7           | 1925.09.15 | 8       |            | 38     | 1933.12.19 |
| 8           | 1925.12.03 | 9       |            | 39     | 1934.03.15 |
| 9           | 1926.02.15 | 10      | 1929.05.06 | 40     | 1934.05.12 |
| 10          |            | 11      | 1929.06.28 | 41     | 1934.07.01 |
| 11          | 1926.06.10 | 12      | 1929.08.28 | 42     | 1934.09.01 |
| 12          | 1926.08.01 | 13      | 1929.11.13 | 43     | 1934.11.20 |
| 13          |            | 14      | 1930.01.10 | 44     | 1935.01.01 |
| <u>(14)</u> |            | 15      | 1930.03.10 | 45     | 1935.03.20 |
| 15          | 1927.01.25 | 16      | 1930.05.10 | 35:特別号 | 1935.05.01 |
| 16          | 1927.03.10 | 17)     |            | (4版)   |            |
| 17          | 1927.05.10 | 18      | 1930.09.18 | 46     | 1935.05.20 |
| 18          | 1927.07.01 | 19      | 1930.11.28 | 47     | 1935.06.20 |
| 19          |            | 20      | 1931.01.17 | 48     | 1935.08.25 |
|             |            | 21)     |            | 49     | 1935.11.18 |
|             |            | 22      |            | 50     | 1935.12.18 |
|             |            | 23      |            | 51     | 1936.03.18 |
|             |            | 24      | 1931.09.10 | 52     | 1936.06.01 |
|             |            | 25      |            |        |            |
|             |            | 26      | 1931.12.20 |        |            |
|             |            | 27)     |            | 55     | 1937.03.01 |
|             |            | 28      | 1932.05.18 | 56     | 1937.06.15 |

# 2019 年度 体育史学会 第8回大会 プログラム・発表抄録集

2019年4月19日 印刷 2019年4月19日 発行

発行者大久保英哲発行所体育史学会

〒245-8650 横浜市泉区緑園 4-5-3 フェリス女学院大学国際交流学部

和田浩一研究室内

Tel: 045 (812) 4287

taiikushi\_office@taiikushi.org

印刷所 ホクエツ株式会社

〒135-0033 江東区深川 2-26-7 北越ビル

Tel: 03 (5245) 8821